



鹿児島県教育

8月号

巻頭言



次期学習指導要領検討始まる

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副会長

野村 義文
県立鹿児島中央高等学校長

現行の学習指導要領に対応した初めての大学入学共通テストが今年一月に実施されました。志願者数は四十九万五千七十一人で全体では十八歳人口の増加の影響もあり、前年から三千二百五十七人増加しました。内訳は現役生の六千四百三十四人増加に対して、既卒生の三千二百四十六人減少で、志願者に占める現役生の比率は八十六パーセントに上昇しました。

高校では三年生に対して就職指導や進学指導の忙しい時期に入っていることと思います。一方で、文科大臣は令和六年十二月二十一日中央教育審議会に対して学習指導要領改訂について諮問し、中央教育審議会での検討が始まりました。主な審議事項は、「質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方」「多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方」「各教科等やその目標・内容の在り方」「教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策」です。我々も現在の学習指導要領に基づいた指導を進めながら新たな時代にふさわしい教育の在り方を考えていく必要があると思います。

また、少子化・高齢化、世界情勢の混迷、生成AI等デジタル技術の発展など、激変する状況の中、将来の予測が困難な社会を支えていく生徒たちへの教育に、我々は責任を持って当たらねばならないと考えます。

私自身、生徒たちがこれからの社会を支えていける人間に育つような教育に、しっかりと取り組んでいかなければならないと考えているところです。

令和7(2025)年 8月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



随想



学ぶことの、楽しさ。

日置地区タレント 岩 本 あいか

私は、日置市吹上町出身の鹿児島タレント、岩本あいかと申します。現在は、KYTのリポーターとしてテレビ番組に出演したり、エフエム鹿児島のパリソナリテイや中継リポーターとしてラジオから声を届けたり、イベントや夏祭りで司会をさせていただいたりしております。

きっかけは、元々歌が好きで、スカウトされ、アイドルデビューをしたことでした。歌やダンスは好きだけど、人前でのトークには全く自信がありませんでした。

私が活動していた時期は、アイドル戦国時代と呼ばれるアイドルブーム。メジャーアイドルやご当地アイドルがとて注目されていました。ありがたいことに、世界大会から地域のお祭りと数々のステージに立たせていただいたことで、経験値も増えました。

周りのライバルチームや他のアイドルを研究していた時、人前で話ができる人が魅力的だと思ったことをきっかけに、自分も頑張返して喋ってみるものの、自己反省する日々を繰り返していました。

その後、ソロデビューしたこともあって、一人で話すしかない環境になり、自信はないなかでも、なんとか喋れるようになっていました。東京の事務所から二年にわたりスカウトを受け、上京を決めました。そこでの活動中、ファンの方やスタッフさんたちから、「話が上手だね」と褒められるようになりまし。もちろん、自分では、優しさで言ってくれているんだ」と受け取り、たくさん褒めていただいても、変わらず自信はありませんでした。

二年と決めて上京したこともあり、鹿児島に戻ってきて結婚、そして娘にも恵まれました。子育て中に、夫から「仕事復帰は、いつぐらいから考えてる？」という後押しに火が付き、ご縁あって、今の仕事が決まりました。私は、歌が好きで、レッスンも受けていましたし、ライブでも歌い手としての自分にしか魅力を感じておらず、いただいていた司会のお仕事も苦手意識があるからこそ、なんとか必死にやっていたという状況でした。

そんなある時、「あいかちゃん、声がいいよね!」と、いろんな方から褒めていただくようになり、司会を楽しめるようになりました。

いろんなジャンルの司会の仕事にワクワク・ドキドキしながら、終えた後の達成感にどハマりしたので、緊張して頭が真っ白になっていた自分が、苦手なトークを仕事に、今では楽しめているなんて、当時の自分からは全く想像できません(笑)

そんななか私が、今、特にハマっていることは、リポーターのお仕事です。最初リポーターとして仕事をしていた時は、心臓が飛び出るかと思うくらい、胸がドキドキしていました。なので撮影の日を迎える度に、緊張しすぎて、撮影が終わった帰りの車では、フラフラ状態でした。でも、ディレクターさん、カメラマンさん、スタッフの方や先輩に教えてもらって、少しずつ流れやポイントも分かったことで、疲れが軽減してきました。

あの時、やりたいことを断念していたらと思うと、なんとか頑張った自分を褒めてあげたいです。出来なかったことが、出来るようになった時、その達成感こそが自分の宝物になると思います。

皆さんは、どうでしょうか?

経歴

二〇一一年に鹿児島初のアイドルとしてデビュー。全国でのライブ活動、ラジオアシスタントやレポーター、イベントのMCやバラエティ内でのアシスタントMC、CM、映画出演など幅広く活動。

二〇一七年には第四回アイドルソクインコンテストで九州一位を獲得。

アイドル卒業後はホリプロ提携・事務所に移籍。

MISIA・MAX・ソニン・リンク・プロデューサー黒須

ヒロ作詞・S.M.A.P・華原朋美・松田聖子など数々のア

ティストに楽曲提供しているコモリタミノル作曲「渚の

ラブレター」を二〇一八年にリリース。

現在は、結婚をきっかけに鹿児島にUターンし独立。

子育てしながらTVリポーター・ラジオ、司会、歌う活動

など、鹿児島タレントとして活動中!

TV出演

・鹿児島読売テレビ

「サテスタ情報」「ユメイロ@ネット」

「It推しTV」「もつとIt推しTV」リポーター

ラジオ出演

・エフエムかごしま

毎週土曜日「Missumi Enjoy カラライフ!」

毎週土曜日「Missumi NOW」中継リポーター

CM出演歴

・モンスターハンター3g&4

・湯楽館 太陽ヘルスセンター

歌手活動

・ECLIFEF AIR 2019 (錦糸木公園)

・九州観光物産フェアin代々木 2017

・2024 24時間テレビ 日の出公会堂

・鹿児島クリスマスマーケット 2019 AMU広場

・宮之城よししく園 夏まつり

・霧島もろみ(霧島国際ホテル)

・若宮神社夏祭り

・美山クラフトウィーク 2024 東郷茂徳記念館前広場 など

イベント司会

・ランニング桜島大会

・2024ベストオブミス鹿児島

・たるみずふれあいフェスタ

(日置市植樹祭、ライオンズクラブ)

・日置市100人イチ

・海沼葵の霊講演演奏コンサート

・吹上秋まつり せつべき など

その他

・二〇二二〜二〇二四 本場大島細クイーン

・映画「六月燈の三姉妹」出演(二〇一四年)

・ドラマ「終わらない世界」出演(二〇一九年)



地域と共に取り組む教育活動の推進

蔵之元小(北) 中村 勲

一 はじめに

本校は創立百五十二年。過去に、山坂達者を中心に長年の体力づくりの取組に文部省から表彰を受けている。一昨年には県学校体育優良校賞をいただくと、歴史と伝統を有する学校である。特に、カヌー・カッター学習や遠泳をいち早く取り入れた活動は、「海洋型体力づくり発祥の地」と言われている。今年度も、豊かな自然や伝統行事のよさを生かし、学校とPTA、地域・関係機関と共に教育活動に取り組んでいるところである。

地域との教育活動は、目的・意義が共有されることで、児童にとっては実体験を通じた学びの場となり、地域にとっては活性化や世代間交流のきっかけとなっている。双方に多くの効果が期待されることから、本校でも積極的に取り入れているところである。

そこで、本校の活動を紹介しつつ、地域と共に取り組む教育活動の成果を再認識したい。

二 教育活動の紹介

(一) 「カヌー学習」

学習はB&G海洋センターの協力をいただいて、水難事故防止学習をはじめ、競技技能を学んでいる。児童は、海での活動の

怖さを克服することから始まるが、B&Gの方々の専門的な技能指導やフィードバックにより、体力・技能面の向上が図られている。

「カヌー学習」は、冒険度も高く五感を強く刺激され、児童の満足度は高い。児童は、夏季休業中も指導をいただき、町行事である長島海峡カヌー横断大会に参加する。大会参加を通して、児童の郷土への愛着や将来の地域貢献意識が育まれている。

(二) 「少年消防クラブ」

四年生以上の児童は「少年消防クラブ」に所属し、活動や規律訓練等を教育活動の中で行っている。避難訓練時に、消防署や地域消防団の方々の指導の下、防災への知識や団の品格・規律保持を目的とした「通常点検(規律訓練)」の所作を学んでいる。毎年の町出初め式には、消防クラブによる「通常点検」を披露している。児童は消防クラブの活動を通して、地域社会の一員としての誇りを感じている。関係機関や地域消防団との連携は、児童や教職員・保護者の防災意識をも高めている。少年消防クラブの活動を地域ぐるみの防災教育として発展させていきたい。

(三) 「蔵之元棒踊り」

校区には多くの御八日踊りがあり、その一つの棒踊りを学んでいる。各地域で伝承奉納される踊りを一つでも児童に伝え、永く継承・保存させることが願いである。踊りの指導は、保存会の方々に依頼している。児童は、伝承奉納の由来や演舞を熱心に学び、運動会や祭りで披露し、伝統奉納を引き継ぐ担い手としてだけではなく、地域住民の絆を深めるなど、コミュニティの活性化にも貢献している。

(四) 「ジャガイモ栽培・販売」

地域農業専門委員や保護者の協力の下、町特産の一つであるジャガイモ栽培に取り組んでいる。全学年で種芋を植え、中・高学年は「長島ジャガイモのおいしさの秘密」をテーマに農業専門員の方々に聞き取り、まとめている。ジャガイモは全児童で収穫し、高学年が校区にある道の駅で販売している。その際に、長島ジャガイモのおいしさの秘密を伝え、長島の特産物の魅力を発信している。

三 おわりに

地域と共に行事に取り組むことで、児童は地域とつながりながら多様な価値観に触れ、地域の一員としての自覚や協働の大切さを学んでいる。こうした体験は、教室での学びを地域社会に生かす力へとつながっている。

今後も、地域は活性化や児童とのつながりを、学校は教育の幅を広げる絶好の機会となることを互いに理解し、共に目的を達成できる教育環境を整え、本校に伝わる「われは海の子大きな心」をもつ、たくましい長島の子を育てていきたい。



子供一人一人が輝ける学校づくり

「人権教育の推進を通して」

古仁屋小(大) 岩 本 博 裕

一 はじめに

昨今、いじめ、体罰、虐待等々の子供に関わる深刻な問題や子供の間にまで携帯電話やスマートフォン等の所持が広がり、SNS等を介しての誹謗中傷等、様々な課題が生じている。子供たち自身が人権侵害の加害者にも被害者にもならず、必要な総合的資質・能力を育てるために、全ての人の尊厳と人権が尊重され、誰もが自分らしく生きることのできる社会を実現するためには、一人一人が人権尊重の精神の涵養を図ることが不可欠であると考えらる。

今回、本誌において提言を行うにあたり、人権尊重の精神あふれる学校をめざして実践していることを、「学習活動づくり」、「環境づくり」、「人間関係づくり」の三点から述べたいと思う。

二 「学習活動づくり」

一人一人が大切にされる授業づくりや互いのよさや可能性を発揮できる場を設定するなど、指導の充実を図ることが重要である。

(一) ユニバーサルデザインを生かした授業改善

ユニバーサルデザインの四視点①焦点化(シンブル)、②明確化(クリア)、③視覚化(ビジョン)、④言語化(シェア)を位置付け、全校を挙げ授業改善に取り組んでいる。

(二)

成就感や達成感を味わわせる個別学習ワークスペース等を活用し、授業中、子供たちが個別的に学習できる環境を整えている。また、子供たちが協働的に学べるように学年に応じて自由進度学習を学級・学年で取り入れるようにしている。さらに、個に応じた課題を準備し、振り返りや家庭学習等で、児童の学習意欲を高めることができるようにしている。

(三)

全校一斉の学習指導
年度初め、全校集会において、学習の進め方や家庭学習への取り組み方について指導を行うようにしている。

(四)

児童の実態等を踏まえた家庭学習
家庭学習については、宿題と自主学習を明確に区別し、発達の段階別の手引きを定めている。また、学級PTAで確実に保護者に説明を行い、啓発も行っている。

(五)

基礎学力定着の「帯タイム」
すぐあきらめてしまいがちな自尊感情の低い子供に成就感や達成感を味わわせ、成功体験を積み上げることで自信をもたせたいと考え、「ストグレタイム」を月曜日の放課後二十分間に位置付けている。

三

「環境づくり」

子供が安心して過ごせる場や雰囲気づくり、校内の環境整備を行うことが重要である。

四

(一)

安心感、所属感を高める校内環境整備
委員会活動や児童会の活動の状況等を報告する掲示板を設置し、子供たち自ら自主的な活動に取り組めるようにしている。

(二)

子供が学びやお互いのよさが認め合える学級・学年掲示
ポスターや作品掲示等をする際には「子供たち全員の頑張りを支援する」、「見るポイントを示す」という観点で掲示している。

「人間関係づくり」

各教科指導、生徒指導、学級経営等において受容的・共感的な人間関係を育成することが重要である。

(一) 縦割り清掃活動の取組

下学年へは上学年への憧れを、上学年は下学年へのリーダーシップの発揮をめざし、縦割り掃除を取り入れていく。

(二) 心の声ポストの設置

子供たちの担任や家族に相談しにくい事案に対する悩み相談が常時できるように心の声ポストを職員室前に設置している。

(三)

子供を理解するためのクラス一斉教育相談
毎月、実施している「ひまわり相談」を業間の時間に組み入れ、子供たちの悩み等を定期的に把握するようにしている。

五

「おわりに」

人権教育の推進に当たっては、校長のリーダーシップと教職員の共通理解のもと、全体計画や指導計画を作成し、組織的、継続的な取組を推進していく必要がある。また、定期的な点検・評価を行い、その都度計画等の見直しや指導の改善につなげていくことも大切である。これからも、子供たち一人一人が輝ける学校づくりに挑んでいきたい。



課題や実態を踏まえた学校経営の具体化

明和小(市) 松久保 鉄也

一 はじめに

本校は、鹿児島市城西地区の高台住宅地にある創立五十二年、児童数三六五人、特別支援学級六を含む学級数十八学級、職員数三十四人の学校である。

学校経営に当たり、自分なりに取り組んだ内容・方法を三points述べる。

二 学校経営方針等の明確化・具体化

目指す児童の姿を達成させるために、取組内容と具体策をグランドデザインで重点化・明確化を図った。さらに、達成状況を的確に把握するための評価項目を、教職員・児童・保護者で統一した。



G D



学校HP

三 地域環境・素材を活用した教育活動

(一) 生活科・総合的な学習の時間等で地域を学ぶ学習を実施しているが、校区人材・素材と関わる活動が設定されていない。

(二) 赴任後、校区の特徴の把握に努め、以下四つを教育活動と結びつけることにした。

ア プール併設のスポーツクラブ

イ 地域住民の学校への高い関心

ウ 中学校と隣接、四つの幼稚園・保育園

エ 充実している成人学級

(三) 具体的な教育活動

ア スポーツクラブとの連携

○ 専門家による水泳指導と

地域施設への関心高揚を目的に、高学年児童と水泳記録会選手への指導を各一回計画・実施

○ 児童の感想では、指導が

分かりやすい、水温が適温で泳ぎやすいが多数

○ 担任からは、指導内容・方法が参考

になったとの感想

○ 保護者・地域の学校への関心を高める

ことを目的に、七・二月の土曜授業日を「CSの日・学校公開」と設定

○ 学校運営協議

議会やまちづくり協議会で伝達、さらに、ポスターを作成し、町内会掲示板での周知を依頼

○ 日頃の授業・テスト・発表会等、日

常の様子を公開

○ 公開の様子は七月十二

日以降、学校ブログで紹介

○ 日頃の授業・テスト・発表会等、日

常の様子を公開



ブログ

四 業務改善

(一) 月四十五時間以内は概

ね達成できていたが、年間三六〇時間以内の未達成が約三割

(二) 前任校での改善策、教

職員から集約した改善策を九月から実施。(以下図参照)また、近隣の小学校の教育課程を参考にした改善策を基に、新年度の計画を立案

(三) 今年度、取り入れた業務改善策

○ 日課表の見直し
(例：月曜日は五校時→帰りの会→休憩)

(四) 家庭訪問の中止と代替策

として保護者の希望による教育相談を実施

(五) 通知表の前・後半化

○ 四・九月を前半、十・三月を後半として、十二月に通知表渡し

(六) これまで七・十一月に分けて実施して

いた教育相談を、七月に全家庭実施

(七) 課題や実態等を踏まえて、子供や地域・教

職員にとってよりよい学校づくりを、今後とも積極的に展開していきたい。



日課表

削減・方法の工夫で効率化できる業務	
① 教内調整・校務関係	全校朝会は改めて実施、他集金は移動時間を確保
② 委員会活動の真で児童代表・保護者委員会を実施	委員会活動は10分以内、15時25分から代表委員会・保護者委員会をスタートする。
③ 全委員会活動の効率化として、全委員会に出席しない保護者は3主任に提案してもらい、提案者は出席しない。	提案者が説明とするが、全委員会での協議案件を精選
④ 全委員会では、必要な提案のみ審議	同上
⑤ 前のボランティア活動→全校で月一回程度朝の時間に行う。	児童のみの完全ボランティアとして実施
⑥ ネットワークボードや職員連絡会での連絡は、シースマイルがよい。シースマイルだと後からでも確認できるというメリットもあります。	現在の実施方法を継続し



「歴史」「地域」「人」に学ぶ教育

中平小(熊) 山口 耕

一 はじめに

本校区は、種子島の南部、南種子町の中央部の台地に位置し、南種子町役場をはじめとした公共機関や商店、旅館などが多く、町の文化・経済の中心地となっている。校区には、町人口の三分の一以上が居住し、他校区からの移住者、Uターン世帯等も多い。また、地域住民の教育への期待も高い。

創立百四十六周年を迎える本校の児童数は百六十八人で、町内児童の約半数が在籍している。通常の学級六学級に加え、特別支援学級が三学級ある。学校職員数は十九人である。

二 学校経営方針

学校経営目標を「ふるさと中平を愛し、自ら学ぶ やさしく 元気な子の育成」とし、人権尊重の精神を基盤に子供の夢と希望を大切に育み、一人一人のよさや可能性を伸ばす教育の推進に努めている。本校では、学校経営方針を具現化するために地域の歴史や地域、人に学ぶ教育を充実させる取組を行っている。

三 「歴史」「地域」「人」に学ぶ教育

(一) 歴史に学ぶ

本校は、戦時中における児童の疎開先の一つが蒲生町であった歴史的背景から、昭和五十一年に蒲生小学校と姉妹校盟約を結んでいる。六年生の修学旅行では、旅程の中に平和学習を取り入れるとともに、姉妹校である同校を訪問して交流活動を行っている。活動では両校の児童に加え、小学校時代に本校との交流を体験した保護者も加わり、盛り上がりを見せている。現在、他の学年でもオンラインの交流学習を計画している。

(二) 地域に学ぶ

本校では、総合的な学習の時間に「ふれあい南種子町」「伝えよう種子島」などの単元を位置付け、種子島の自然や伝統文化、産業について、体験を通じた学習を行っている。

「自然を学ぶ学習」では、種子島の地理的特徴や自然環境について学び、川や海岸

の環境保全活動を行っている。

「伝統文化を学ぶ学習」では、地域に伝わる風習や由来などを学び、郷土芸能の一つである棒踊りの伝承をはじめとした体験活動を行っている。

「産業を学ぶ学習」では、黒糖づくりを中心に取り扱い、種子島で黒糖が生産される理由を学びながら、オーギ(よごとうきび)の植え付けや砂糖すめ(製糖作業)の体験活動を行っている。

(三) 人に学ぶ

本校には「中平小学校学校応援団」があり、二十八人の地域の方々に支援をいただき教育活動を行っている。支援内容としては、登下校の見守りや読み聞かせ、校外学習の引率補助、さらには、習字や裁縫、水泳といった教科指導に関することなど幅広い。中でも水泳指導は、インストラクター資格を持つ方が、児童だけでなく教師の教材研究についても積極的な支援を行っている。職員や児童は、応援団の方々の思いに触れ、学校や地域での交流を深めている。

四 おわりに

本校は、歴史や地域、そして人々のつながりによって充実した教育活動を展開できるようになっていく。

今後は、子供たちのより豊かな学びにつながるよう、地域との連携を深めながら更に質の高い教育を目指したい。



ふるさと 故郷で学び

ふるさと 故郷に学ぶ

地域の宝を活かして

はらひがわ
祓川小(隅) 牧野 忠 彰

一 はじめに

本校は、全校児童三十四名で、今年度から一・二年、三・四年、五・六年の完全複式学級となった。また、同時に、予想より早く学校再編対象校にもなったところである。一学年二桁に満たない本校児童には、もの怖じせず「自主性(やる気)」を育成したいと願っている。

本校区は、大隅半島の中央部にある鹿屋市に属し、市街地から北へおよそ5kmの位置にある。高隈山系と笠野原台地の中間を南北に流れる肝属川沿いに田園地帯と細長く点在した集落が形成され、自然豊かな環境にある。また、市無形文化財として「八月踊り」「棒踊り」が継承されている。

二 取組の実際

冒頭で述べた自主性。その元となる「やる気」は、自信と興味から生まれると言われる。そして、自信は成功体験(自己効力感)の積み重ねにより更に自信がつくといった好循環が生まれ、困難なことにも挑戦する勇氣につながる。また、興味は物事に集中しやすくな

る原動力になる。

子どもたちに、いかに自信を持たせ興味を持たせるか。そして、いかに成功体験を味わわせるか。本校では、豊かな自然体験と伝統文化継承を教育活動に取り入れている。

(一) 八月踊り

祓川地区に伝わる市指定無形民俗文化財「八月踊り」。江戸時代中期から伝わり、豊作に感謝する意味合いがある。秋に地域住民が踊りを奉納し、本校では全児童が学習する。

(二) 棒踊り

豊作祈願のため約四百年前から伝わりとされる市無形民俗文化財「棒踊り」。身分制度の確立で刀を取り上げられた農民の士気を鼓舞しようと、武芸に取り組んだとされる。本校では、三年生以上が学習する。



(三) 米作り体験

※ (一)(二)とも、祓川と上祓川の二集落で踊り方が違うが、本校では二集落から踊りについて学習し、九月の運動会で披露。その後、二集落で行われる十月の八月踊りと三月の棒踊りにも参加する形をとっている。

地域学校協働活動として取り組んでいる。田植え(六月)から始まり、田車押し・稲刈り・脱穀・試食会(十二月)まで、地域の方々の協力をいただきながら実施。稲刈りと脱穀は保護者も参加し、親子ふれあいの場として位置付けている。



三 おわりに

本校では児童数が減少し、校区が自然豊かな田園地帯にあり、市指定文化財が四つ存在している環境であることから、地の利を活かした特色ある教育活動を行っている。かつて、「八月踊り」は女性で、「棒踊り」は五年生以上の男性といった風習があったらしい。しかし、時代の変遷とともに男女とも体験できることになり、「棒踊り」と「米作り」は今年から三年生以上の学習に変え、発達段階に応じた学習の在り方を模索中である。

これからも、故郷に自信と誇りをもち、自主的に行動できるような「子どもが輝く教育」を目指していきたい。



幼小中併設と分校、 更に地域との連携を活かした教育の推進

西阿木名小(大) 浦村 正 幸

私が勤務する天城町立西阿木名小中学校は、徳之島にあり、大変自然豊かなところである。本校は天城町の最南端に位置し、東は山地を境に徳之島町、南は伊仙町に接している。校区内には、天城町で初の県指定文化財となった戸森の線刻画や考古学的にも大変貴重な下原洞穴遺跡などの史跡のほか、世界自然遺産地域も有している。また、伝統芸能の棒踊りやハマヤキトシ、十五夜踊りのほか、県指定無形文化財のモチダボレなどの伝統行事が現在も受け継がれており、貴重な史跡・自然・文化が継承されている。さらに、地域住民との距離が大変近く、学校行事等は地域と合同で実施されることも多いため、地域住民の学校への愛着は強く、学校に対して大変協力的であるありがたい環境下にある。

本校は、小中併設の極小規模校であるが、同一敷地内に町立の幼稚園があり、また、約七キロほど離れた所には三京分校がある、県内でも大変珍しい学校である。そういった本校ならではのよさを活かすことが、子どもが輝く教育に繋がるかと私は考える。そこで、子どもが輝く教育について、幼小中併設のよさを活かした教育、本校と分校の連携を活かした教育、さらに、地域の自然環境や人材を活用した教育の三点について述べる。

まず、幼小中併設を活かした教育であるが、小学生と中学生が一緒に行う活動は、日常的に計画されている。そういった活動では、中学生は小学生にとってこれ以上ないモデルとなっている。そのことを中学生自身も自覚しているため、小学生の前で恥ずかしい態度はとれない。例えば、月に一度設定されている児童生徒朝会では、中学生の本部が司会進行を行うが、小学生にも学習文化部や保健生活部といった担当があり、各部からの連絡を行わなければならない。少人数であるため、三年生以上の児童は必須なのである。大変緊張する場面ではあるが、小学生は中学生の発表をしっかりと聞いて、それをモデルにして自分たちも発表するのである。発表が終わった後の自信に満ちあふれた顔は、見ているこちらも嬉しくなる。このほかにも、幼小中合同の避難訓練や運動会、学習発表会等も設定されているが、幼稚園児が入ってくると、そのお世話を小・中学生が進んで行い、自立した活動になっている。このように、お互いをモデルにしたり、支え合ったりすることで、子ども一人一人が生きていくと輝く活動が日常的に展開されている。

次に、本校と分校の連携を活かした教育であるが、本校と分校では、それぞれのよさを活かした教育課程が編成されている。しかし、お互

いに少人数であるため多様な考え方に触れたり、相手を意識した表現活動が乏しかったりするといった課題があった。そこで、本校と分校との合同学習を意図的・計画的・継続的に仕掛けることにより、子どもたちの学習をより主体的に活性化させ、深い学びへと深化し、子どもが輝く教育が展開できるようにしている。その代表的な学習として、道徳や図工、音楽がある。これらの教科であると教科の進程も揃えやすく、また、本校と分校の職員がいるため、複式が解消され単式での授業ができたり、また、複式であってもT・Tでの指導ができたりするため、全体指導と個別指導が充実し、子どもたちにとって楽しく満足できる学習となっている。さらには、運動会は本校・分校ともに実施しているがお互いに協力参加しており、少人数においても競い合う要素も生まれている。このように、本校と分校の連携を活かすことにより、子どもが輝く教育を展開している。

最後に、地域の自然環境や人材を活用した教育であるが、町教委と連携し、下原洞穴遺跡に発掘作業に参加・見学させていただいたり、世界自然遺産学習「あまぎ学」において自然保護員の方にガイドを依頼し、校区内の世界自然遺産区域に入り動植物の観察をさせていただいたりしている。ほかにも、三味線や島唄、棒踊りや夏目踊りなど、その指導には地域の方々の協力をたくさんいただき、地域を学び地域を愛する心を育んでいる。学んだことを学習発表会やその他の場で発表することにより、子どもたちが光り輝く場を設定している。これら三つの取組を中心に、本校では子どもが輝く教育を実践している。

本校に赴任して、まだ三月ではあるが、今後も、子ども一人一人が輝く教育活動が展開できるように尽力していきたい。

心に残るひとこと



何を言ったかではなく、誰が言ったか

吉野東小(市) 藤川 等 志

新任校長になり、県総合教育センターでの新任校長研修会に参加した。人事管理監の講話の中で、「何を言ったかではなく、誰が言ったか。」という話があった。その時私は、ハッとした。四月の入学式において、校長として初めて式辞を読んだ。式が始まる前は、これまでに、いろいろな場面で、大人数の前で話すことも経験があったし、指導主事時代には、小学校や中学校の入学式や卒業式において、何回も壇上に立ち、話をする機会があった。ましてや、書いてある式辞を読むだけなので、さほど緊張することはないと思っていた。しかし、「式辞」と読み始めた途端、今まで味わったことのない感覚に襲

われた。体育館にいる子供たち、保護者、来賓、そして職員の見線が、まるで川の流れるように自分に襲いかかってくるような感覚に襲われた。手も震え始めた。あれは、まさしく「誰が言ったか」つまり、「誰が話をしているか」ということに気付き、「校長」が話していることの重みを感じた瞬間であった。後日、その話を先輩の校長先生にすると、「卒業式は、もつとすごいぞ」と、教えていただいた。

「冥府魔道をゆく」(めいふまどうをゆく)。天皇陛下の心臓バイパス手術を執刀した天野医師の言葉である。「冥府」とは、死後の世界または地獄、「魔道」は邪な人の道ではない道。地獄のような魔物の道を生きたというような意味。天野医師の「もう後戻りはできない、前に進むしかない」と、覚悟を決めました。」の心境で校長職に向き合い始めた。あれから七年がたち、役職定年まであと一年余りとなった。あの、川の流れるように押し寄せてくる感覚は、毎回感じるが、回数を重ねるごとに客観的に受け止めることができるようになった気がする。学校という組織を機能させ、任せるところは任せ、結果がよくても悪くても責任をとる。子供たちの前ではニコニコと笑顔を振りまきながら、校長職を全うしたい。

やさしく たのしく しみじみと

～臨床の薫り～

柁城小(始伊) 有 村 和 章

年明けに、大学時代に所属していた自閉症児療育サークルの恩師の喜寿祝いに出席した。先生が第一線を退かれてから十年余りたつにもかかわらず、幅広い年代の元学生や自閉症児・者をきょうだいにもつ方々が集い、再会を喜んだ。この先生の下に、なぜ、いつまでも、そしてこんなにも多くの人が集い続けるのか。標題は先生のエッセーをまとめた本のタイトルだが、ここに答えがあるように思った。

先生は、心理学教授とは言え研究室にこもることはほとんどなく、多くの時間を臨床の場で過ごされていた。集う者の名前を全て覚え、いつもにこやかにしみじみと語りかけるのだ。この日の挨拶でも、

「教えているつもりがいつの間にか教えられていた。援助しているはずがいつの間にか援助されていた。だから、こんな場はちょっと恥ずかしいね。」

と、静かに話された。先生がこれまで直面してこられたのは、いわゆる「現場」であり「最前線」であるが故に、難題ばかりであったに違いない。

障害のある子供をもつ家族の悩み、人生に希望を見いだせない方々の心の叫び、病床で自身や家族の行く末を案じる方々の思いなど、そう簡単には答えの出ない事柄ばかりだっただろうと思う。しかしながら先生は、標題の言葉を口癖に、その言葉どおりの振る舞いを、いつも見せてくれたのである。

教育の最前線に立つ私たちにも、通ずるものがあると思う。年数を重ねるごとに多くの事案に出合う。これまで養ってきた見方や考え方は対応できないようなことも、今後を経験するだろう。「いつも心穏やかに、にこやかにありたい」と思いながらも、そうはいかないことも多い。しかし、様々な思いを抱えながら、「やさしく たのしく しみじみと」語り合い助け合いながら、幾多の難局を乗り越えていきたい。先生の笑顔を思い浮かべながらそんなことをしみじみと思い、帰路に就くことだった。

私は管理職を信用していません

長田中(市) 奥 山 茂 樹

最初で最後の校長職。今までの経験や知識から子供像や学校像、職員像が膨らむ。そして、やりたいことが次から次に描かれる。実現のた

めには本気で職員のウェルビーイングを目指す。心理的安全性の確保と、サーバントリーダーシップの発揮、教職員集団の同僚性の構築……。そんな思いで過ごしていた。

あれは、一年目の五月末、期首面談も終わりに近づいた頃。表情を強ばらせたその職員は、「私は管理職を信用していません。」と声を震わせた。一瞬の沈黙後「えっ。なんで、何があったの。」と尋ねた。最初は渋っていたが、ポツリポツリと話してくれた。今までの教職生活でのひどく心を痛めたことや悔しい思い、諦めの気持ちが伝わった。「先生、どうしたい。何かできることある?」と聞いても「いやいいです。」の一点張り。私は「じゃあ、管理職へのあなたの思いを変えられるよう、私は頑張ってみる。」と宣言した。

さて、社会は変革の真っ只中、複雑化、多様化の相を示し、予測困難な社会が到来しつつある。我々は社会の構造的な変化を掴み、同調圧力や正解主義から脱却していく必要がある。大事なことは、立場や年齢などを超えた異論や思いもよらぬ発想を面白がって学ぶ感性である。キーワードは校内研修。新たな教師の学びの姿を推進すべく、様々な試みを心掛けた。

年末のある日、件の職員が校長室を訪ねてきた。「教務主任をしたい。」まっすぐ見つけるその眼差しに心震えた。「様々な研修をしてきたけど、自律した学習者の育成に向けたカリキュ

ラムを編成したい。」と。その頃、来年度は、教頭室に教務主任と生徒指導主任を移し、三人体制で進めることを公言していた。その大変さを返すと、「いえ、校長先生の近くでもっと学んでみたい。」の一言。現在その職員は、学校改革のリーダーとして活躍している。巷には名言、金言は溢れている。しかし、私にとつて、校長職を支えた言葉は、ある職員が言い放ったこの言葉である。

行動こそ真実

薩摩中央高 中 須 康 文

「行動こそ真実」これは私が何か考えたり、思いを伝えたりするときに必ず思い出す言葉である。

二十代後半に奄美大島の笠利に住んでいたときに「兄い」との出会いがあった。兄いは、町の商店の店主であり地元ソフトボールチームの主将、私をそのチームに誘ってくれた方である。兄いは試合や練習の段取りをほぼ全て一人で、そして集まる度に兄いの店の車庫で開かれる宴の準備や片付けも、ほぼ一人でやってくれていた。皆が楽しく集まり語らうために、全く労を惜しまない方だった。さらに兄いは博識で教育

や心理学などにも通じており、皆から頼られる存在であり、私もいろいろ相談をさせてもらった。しかし、何故小さな町の商店の店主が、こんな凄い方なのかとても気になっていた。

あるとき、兄いと二人きりで話す機会があり、兄いの過去を聞くことができた。兄いは若い頃、家族関係のことで大きな悩みを抱えて、自暴自棄になることがあったそうだ。悩み悩んだ末にたどり着いたのが「自分を変えること」。前を向くために必要な知識をしっかりと身に付け、それを行動に移すこと。そのため、たくさんの専門書を読みあさったり、時には自己啓発の研修を受けたりと、自分自身を変えるために必死で頑張ったそうだ。兄いの覚悟や背景を知り、一層兄いへの尊敬の念が大きくなった。兄いの利他の精神や、思いやり、行動力などの裏には、到底自分には真似のできない努力があったのである。

兄いと酒を酌み交わしながら教育の話で盛り上がり上がつていたときのこと、私が得意気に理想論を話していると、兄いがポツリとささやいた。「康文、行動こそ真実とお」。私はドキッとした。何か見透かされているような。そして自分は、本当に口だけでなくちゃんと行動ができているのかを自問自答した。

三十年近くたった今でも、「行動こそ真実とお」という兄いのささやきが聞こえてくる。

ある日の校長講話



「心の形」(宮澤章二『行為の意味』より)

薩摩小(北) 永田 奈美

今週は人権週間です。人権は全ての人があるとしても大切なもので、皆で守っていかなければなりません。「人権を守る」というのは、「誰もが、人として安心して自分らしく生きていけるようにすること」です。

さて、皆さんの「心」はどこにあると思いますか。その心はどんな形をしているのでしょうか。(子供たちは頭や胸を指したり、手で心の形を作ったりする。)残念ながら「心」は形がなくて、目で見ることができません。しかし「心○○○」は見えます。さて、○○○の中にはどんな言葉が入るでしょうか。○○○には「づかい」という言葉が入ります。「心づかい」です。心は目

に見えませんが、「心づかい」は行動として見えるのです。では、「心づかい」とは何でしょうか。「心づかい」とは、周りの人の気持ちを考えて優しい言葉を掛けたり、「どうしたら相手が喜んでくれるかな」と考えて行動したりすることです。つまり、相手を大切に思う「思いやりの心」が形として表れたものです。

(乱れたスリッパの画像) 先日、児童総会で、「トイレのスリッパが乱れていて気持ちよく使えない」という意見が多く出されました。(並べられたスリッパの画像) では、こちらはどうかでしょうか。このスリッパには、どのような気持ちが見えますか。誰かが次に使う人のことを考えて、きれいに並べてくれたのだと思います。つまり、その人の「優しい心」が、「優しい心づかい」となって、スリッパをきれいに並べるという行動として現れたのです。では、心づかいには他にどのような言葉や行動があるでしょうか。(子供たちから、様々な意見が出される。) お互いの人権を大切にして生活するために、相手に対する優しい心・思いやりの心をもつこと、そして、その心を言葉や行動で「心づかい」として表すことがとても大切です。優しい心と心づかいがいっぱいあふれる学校、みんなが笑顔で、楽しく、安心して過ごせる学校にしていきたいです。

しあわせの種（スライド使用）

戸口小（大）森 智 子

六年生が一月に受けた調査の中で、「幸せを感じるがありますか。」という質問があり、六年生は、七十八%の人が「よくある。」、二十二%の人が「ときどきある。」と答えていました。合わせると百%。六年生は、幸せを感じながら生活をしていることが分かり、とても嬉しく想いました。「幸せを創り出す力 幸せを感じる力」が高いのだなあと感じました。そこで、他のみんなにも幸せに過ごしてほしいので、私が考える幸せの種を十個伝えるね。「いいな。」と思う種があったら、心に植えて育ててくださいね。

一つ目の種「命を大事にしてね。」

あなたの命は、たった一つ。あなたの命でもあるけれど、あなたを愛するみんなの命。あなたの命は、たくさん人の宝物なのです。

二つ目の種「自分を好きでいてね。」

生きているとね、時々「どうして自分はこうなのだろう。」と、自分を嫌いになりそうなのもあるんだ。でもね、あなたは地球の人口約八十億人の中のたった一つの輝くあなた。あなたならではのよいところが絶対にあります。自信

をもつてね。もし、自分を嫌いになりそうなきは、魔法の言葉「まあいいか！」で、自分を許してあげてね。自分に優しくしてあげてね。

三つ目の種「違いを認め、楽しんでね。」

私はイモムシを食べない。でもA国の友達には、イモムシをバナナの皮に包んで焼いて食べるよ。「えっ、気持ち悪い。嫌だあ。」ではなく、「国によって違うんだ。おもしろい。」と、違いを認め、楽しめる人になってね。

四つ目の種「プラス思考で生活してね。」

給食当番の食缶係。「嫌だな。重いな。」ではなく、「筋トレだあ。」と考えたら、なんだか食缶持つのも悪くない。ぐんと軽く感じるかも。

五つ目の種「失敗しても大丈夫。」

失敗は、悪いことではないよ。何で失敗したのかを考えることで、あなたはぐんと賢くなるはず。ひるまずにいろいろなことにチャレンジしてね。

（残り五つは省略。全校児童の笑顔の写真を掲示）

みんな幸せになろうね。



平和について考える

安房中（熊）鶴 田 莊 太

オリンピックは、世界中の人々がスポーツを通じて友情と相互理解を深める、素晴らしい祭典です。その精神は、競技を越えて互いを尊重し、平和を築くことにあります。しかし、歴史を振り返ると、戦争が多くの人々の生活を破壊し、平和を脅かしてきた現実があります。現在も紛争が続く地域があり、そのためにオリンピックへの参加が叶わない人々がいることも、また事実です。

日本で東京オリンピックが開催されたのは、記憶に新しい二〇二一年と、高度経済成長期の象徴である一九六四年です。しかし、実はその前、一九四〇年にも開催が予定されていました。これは一九三九年の第二次世界大戦勃発により「幻のオリンピック」となってしまいました。その後、日本は広島と長崎に原子爆弾が投下され、多くの尊い命が失われました。その悲惨さは、修学旅行で長崎を訪れた皆さんだけでなく、これまでの学習を通して深く理解していることでしょう。そして、八月十五日は終戦記念日です。戦争の悲劇を乗り越え、平和を取り戻した

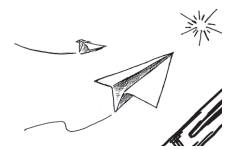
日本だからこそ、これまでオリンピックを開催することができたのです。このことは、平和がいかに重要であるかを再認識させてくれます。

オリンピックのような国際的なイベントは、異なる文化や背景を持つ人々が、一つの目標に向かって協力し合う貴重な場です。これは、私たちが日常生活で実践できることでもありません。学校でも、家庭でも、友人関係においても、互いを尊重し、理解し合うことが、平和への第一歩となります。

皆さんには、是非オリンピックの精神を心に留め、平和を築くために自分に何ができるかを考えてほしいと思います。小さな行動が大きな変化を生み出すことがあります。例えば、困っている友人に手を差し伸べることや、意見が異なる人とじっくり話し合うことも、平和へ向けた大切な一歩です。私たち一人一人が「平和の大使」となり、戦争のない世界を目指して努力していくことが重要です。皆さんの未来が、平和で明るいものであることを心から願っています。

この八月には、今日話した内容をご家族とも話し合ってみてください。

話のひろば



究極の

ファン第一主義

野神小(隅)

宮園

誠

令和七年六月三

日、ミスタープロ野球と呼ばれた長嶋茂雄さんが、八十九歳で亡くなられました。

「記録の王、記憶の長嶋」と呼ばれています。十七年間の現役生活では、首位打者六回、ホームラン王二回、打点王五回、最優秀選手を五回受賞と、輝かしい記録も残しています。まさに、「記録と記憶の長嶋」だったということです。「長嶋は天才」だと言われますが、現役時代は、「努力は人に見せるものではない」と、練習する姿をほとんど見せなかったそうです。本人も、「自分は天才ではない。努力型だ」と言っています。

父親の影響で、小さいころからテレビで巨人

戦を見てきた私は、自然と巨人ファンになっていました。宮崎キャンプは毎年の楽しみの一つです。今は、ビーバーで放課後、学校の草刈りをして、一汗流して、学校の裏にある徒歩一分の校長住宅(住所も学校と同じ)に帰って、温泉のもとを入れた風呂に入って、さっぱりしてから、コンビニで買ったつまみで、朝家を出る時に冷やしておいた、最高に冷えたビールを飲みながら、巨人戦を見るのが最高のストレス発散(今年は調子がもう一つなので、ストレスが逆に溜まることもあるのですが)になっています。学校でいろいろあっても、ほぼ忘れることができます(残念ながら完全にではありませんが)。

長嶋さんは、ファンあつてのプロ野球家ということを強く意識し、どうすればファンが喜んでくれるのかをいつも考え、実行していた(ヘルメットの飛ばし方まで)といえます。選手時代と監督時代、たとえ、大差で負けていたとしても、試合が終わるまでは絶対に諦めなかった。それは、球場に応援に来ている人は、何回も来られる人もいれば、一生に一回の人もいるのだから、プロとして、ファンに対して失礼なことは絶対にしてはいけないということを徹底していたそうです。

プロ野球選手にとって、一番大事にしないといけないのはファン。では、教員（教育のプロ）にとって、一番大事にしないといけないのは…。

一生に一回しか出会わないかもしれない○○○のために、自分ができること・しなければならぬことを、残された教員人生で考えていきたい。

誠心誠意

土橋小（日）

加藤 研一郎

気が付けば管理職に就いて十七年が過ぎた。教頭生活は児童数三十七人の複式学級のある学校でス

タートした。着任し、校長先生に指示された最初の仕事は前年度の公文の片付けと、教頭は何かと職員から聞かれるだろうからと学校内のどこに何があるかを把握しておくようにすることの二つであった。一日半程を費やし、それらの作業を終えたところで、着任二日目の私に、職員が入学式の道具がどこにあるか尋ねてきた時は驚いた。しかし、職員は分からないことがあ

ると、とりあえず教頭に聞くものであることを理解した。そして、早々に解決できた達成感と役に立てたことの喜びを感じることもできた。

新任教頭研修会があり、久しぶりに会う友人たちと近況を語り合う中で、校長先生がどれだけ思いやりと気遣いをもって自分を指導してくださっているかを知った。思い返すと、公文の片付けをしながら新学期が始まるまでにしておかねばならない仕事の段取りを考えることができたし、校内を把握したことで、尋ねられても短時間で解決できたことで、必要な人にとって自分にとってもだいぶ効率が良かった。あの一多半の時間が、職員の言葉に耳を傾け、サポートする心のゆとりを生み出していたこと、年度始めの煩雑さに身も心も疲弊しすぎることなく乗り越えられたことに気付かされ、校長先生の深い思いやりと新任教頭の自分を大事にしていただいていることに改めて心から感謝の念を抱いたことを思い出す。

この時の校長先生には二年間、仕事のことはもちろん様々なことを教えていただいたが、指導されたという記憶はほとんどない。それは、他の職員に対しても同様に思えた。しかし、服

務関係のことをはじめ、言いにくいことを言わねばならないときや指導しなければいけない場面もある。そのようなときはどうされているのか尋ねたことがあった。管理職に就くにあたり、私の中で「職員に指導する」ということを頭では理解していても、どうしても引つかかっていたからだ。やはり、毅然と等なのかと想像していると意外な答えが返ってきた。その人のことを心底大事に思いながら指導すべき内容について語るのだと。その言葉を聞いて、もやもやしていたものが晴れた気がした。そして、誰に対しても誠意をもって相対するようにしているとも言われた。これは今日に至るまでの私の管理職として、人としての自分の在り方の核となっている。

これからも「誠心誠意」子供、職員、地域のために努めていきたいと思う。



際の強さ

鹿屋高

松崎浩隆

使い方としては、

勝負際、土俵際という言葉があります
が、「際」ですので
想像するのは、土壇

場の場面とか、絶体絶命の場面、一進一退の攻防の場面です。スポーツの世界を例にとると、フィジカルも大事、スキルも大事なのは言うまでもありませんが、最後に勝負を分けるのはこの「際」の部分だと感じています。もちろん、これはスポーツの世界だけでなく、人が生活してきた中でも自ら経験していることで、おそらく薄々自分でも感じている部分なのだと思いますし、これからの人生の中でも必ずと言っていいほど出てくる場面だとも思います。ですから生徒には、人生の中の「際」の場面で、力を発揮できるような人間になってほしいと語り掛けています。

要は、そのとき心地よい精神状態でありたいと思うのが人の常ですので、今をどう生きればよいか、どう生活すればよいかということを突き詰めて考える必要があるのです。一流と言われる人は、この部分も真剣に突き詰めて考えて

います。では、そうした場面で真の強さを発揮できる逞しさ、この「際の強さ」をどう養えばよいのでしょうか。そこはやはり、人間力を高めることが一番なのだろうと思います。

では、人間力というのはどんな力なのか？ある文献では、次のように定義されています。「人間力とは、自立した一人の人間として、力強く生きていくための総合的な力」と。この言葉を使うシーンによっても、多少意味合いは変わってくるのだと思いますが、この総合的な力の中には様々な力があって、生活習慣力、他喜力、徳を積む力、やり抜く力、精神力、集中力等々。列挙していくと数限りないのですが、これらの力は人としての考え方や在り方の部分なので、一朝一夕に身に付くものではなく、習慣性や継続性がどうしても必要になってくるものです。なので、その瞬間、際の場面だけ特別なことを神様におねだりしても、自分に味方してくれるはずはないのです。石の上にも三年、風雪五年、苦節十年、弛まぬ学びや粘りを積み上げていくことの大切さが、様々な場面で説かれているその意味を、深く考える必要があるのだと思います。

読書案内



■ 小巻亜矢 著

来場者4倍のV字回復！

サンリオピューロランドの人づくり

竹子小(始伊) 寶満 幸 博

校長として、子供たちのために、教職員の前向きな考え方を取り入れ、保護者・地域の方々と密接に関わりながら、学校をよりよい方向へと導きたいと常々考えている。しかし、現状は厳しく、思い描いている方向に進まないことが多々ある。このような現状を打破するためのヒントを得たいという思いから、書店や図書館に通い、「リーダーシップ論」「人を動かすためには」等の書籍を熟読するように心がけてきた。

そのような中、本書の冒頭部分の、「サンリオピューロランドが奇跡のV字回復を果たした」という文章に引き付けられた。経営が危機的状况にある中、著者が館長となり、二年で黒字に導いた。低迷していた入場者数を増やし、どのようにして黒字にかえることができたのか。その工夫や心構えが豊富に掲載されており、私にとって、大いに参考になるものであった。その一部を紹介したい。

著者が、館長になったときは、館内が暗く、スタッフには笑顔が少なく、すべてがどんよりとした状況であった。その原因の一つを、連携不足やコミュニケーション不足に因るものと捉え、みんなの話を聞く機会を設定し、一人一人の話を徹底的に聞くことから始めた。

また、リーダーの姿勢として左記のように述べられている。

○ 最終的にイエスと言ってもらうための大切な心構えは、「一回で突破しようと思わないこと」です。

○ 相手の提案を待つことで、自分事にしてもらい、最終的に「協力するしかない」と思ってもらえたら成功です。

○ 「新しいことをやりたいけれど、社内の反発が強くて・・・」こんなときに心掛けているのは「こそっとやる」こと。「これちょっとやってみたいんですけど。」と、さりげなく提案します。使えるキーワードは、「期間限定」や「お試し」。大上段に構えず、「実験させてください」という姿勢で入るのです。逆に、絶対にやらないのは「改革」という旗を振ること。改革ということばは聞き手に、現状を否定しているという印象を与えてしまいます。

○ 何か相談したいときは必ず、自分から相手のところに向きます。

等々、学校をよりよい方向へ導くためのヒントが多く掲載されている。

ダイヤモンド社 千五百四十円



■ 和田秀樹 著

60歳でリセットすべき100のこと

別府小(南) 下曾山 隆

小・中学生の頃は読書好きで、SFや推理小説、伝記等を好んで読んでいた。早く物語の続きが知りたくて、夜遅くまで読書に親しんでいたのが懐かしく、遠い昔の思い出の一つである。図書館にない読みたい本は購入していたと記憶している。

さて、この「60歳でリセットすべき100のこと」は、書店で本を探していた時にふと目に留まった本であり、間もなく六十歳になり、役職定年になろうというタイミングにマッチしていたのかもしれない。誇りをもって脇にどくまでもう少しである。

本書は、精神科医である和田秀樹氏が、六十歳を過ぎてもはつらつとしている人は、自分の好きなように生きていると感じて、無理をしない、我慢をしない生き方が人生後半を楽しむ秘

訣だと考え、書かれたものである。内容としては、「一、人づきあいを整理する」「二、お金やキャリアについて整理する」…「六、考え方や価値観を整理する」など、全六章構成で書かれている。私自身がここ数年考えていた「年賀状じまいや、何でも試す習慣を身に付ける、人生を逆算して考える」など、なるほどと参考になることがいくつも書かれている。管理職として、危機意識を高くもちながら日々を過ごしている中でふっとリラックスできる書籍である。

高校生ぐらいからは部活や勉強が忙しくなり、読書と離れる時間が長く続いた。教職についてからも同様であったが、担任をしている頃は詩集や絵本に親しんだ。三十五歳を過ぎてから何度か入院することがあり、その際は読書に明け暮れた。東野圭吾や西村京太郎、内田康夫等の書籍を多く読んでいた。また、「1Q84」(村上春樹)や「海賊とよばれた男」(百田尚樹)はここ数年の中で記憶に残った書籍である。多様な毎日の教職生活だが、読書に親しむ時間を大切にしたいものである。読書好きな子供の育成を目指す教職員ならなおさらである。

永岡書店 八百五十円

■ 西川善文 著

仕事と人生

蒲生中(始伊) 富 永 英 明

昨年度、新任校長として蒲生中に赴任した四月に、本校の現状と課題を把握した上で、学校教育目標を実現するために、目指す学校像や生徒の姿を学校経営方針に示した。課題解決に向けての具体的な取組を、教職員や家庭、地域等と協働して日々試行錯誤しながら実践した一学期であった。夏季休業に入り、充実した学校経営が一学期できたという実感はなかったが、少しほっとしていた七月末に本書と出会った。

本書の著者、西川善文氏は、三井住友銀行初代頭取や全国銀行協会会長、日本郵政株式会社初代社長等を歴任された人物である。職種は異なるが、手に取ってみると、興味深い内容が記されていた。本書は、六章から構成され、一章の「評価される人」では、ものごとをシンプルに考えることが大事であり、枝葉末節にこだわ

って、あることないことを取り混ぜて考えたら、まとまる考えもまとまらない。シンプルに考えてポイントを絞ることで、周りの人が理解しやすくなると訴えている。六章の「危機に強い人」では、「不都合な現実」から目をそらさず、必要な見切りをつけ、「自分でやる以外にない」と決意することが重要だと訴えている。その他の章には、「成長する人」「部下がついてくる人」「仕事ができる人」「成果を出す人」について、西川氏自身の経験を交えつつ、会社や組織での働き方や生き方について語られている。

現在、校長職二年目を迎えているが、本書から刺激を受けた内容を意識しながら学校経営に取り組んでいる。学校をひとつのチームとしてまとめ、所属する教師一人一人のよいところを引き出しながら信頼関係を築き、協力して目標達成に向けて、これからも精いっぱい学校経営に取り組んでいきたい。

講談社現代新書 九百九十円



教職三十三年目をスタートしたこの四月。また、新たな経験をさせていただくことに感謝しながら、期待を胸いっぱい膨らませ今がある。

今回、その一つとして、「趣味・文芸」への原稿執筆の依頼をいただいた。大した趣味も持たず、文化・芸術への博学もないため、頭をひねる日々。そうこうしているうちに、原稿締切期を迎え、あたふたしている。こんな時に、生徒たちの顔が思い浮かぶ。そして、「見通しをもって、計画的に進めないとね。」なんていう、今まで生徒たちに指導してきた自分の言葉が胸をチクリと刺す。

そんなことを思っていても終わるはずのない宿題。今まで目を背けてきた自分に向き合うしかなく、何とか自分の好きそうなことを絞り出してみたい。

その一

今まで私は、教諭とし、五校に勤務してきた。教頭として一校。校長として一校。いずれの勤務地にも共通することがある。全ての勤務校において、部活動指導に携わっていることだ。

若い頃は、放課後の部活動指導の時間を心待ちにしながら、様々な業務を担っていた。恥ずかしながら、この時間のために、学校に勤務していたと言っても過言ではない。

しかし、その中でも心掛けたことは、「あの先生は部活動指導しきれない、できない。」とだけは言われないようにしようということだ。そのため、校内の校務分掌である担任や〇〇主任など、快く引き受け、自分のもてる全力を尽

趣味・文芸

未来へ紡ぐ

くした。部活動の生徒たちにも学級での仕事などは、積極的に引き受けるよう指導してきた。現在は、部活動の地域移行も推進され、学校教育だけではない地域の力をフルに活用する制度が構築されつつある。歓迎する想いと、何だか寂しさを感じる気持ちとが交差する。

これまで、「ブラック部活動」という言葉が、ちまたをにぎわすことがあった。私個人としては、青春時代を全力で生きた生徒たちの姿に触発され、自らも豊かな時間を過ごすことができたと自負している。部活動を通して中学校三年間での生徒たちの心身の成長には目覚ましいも

のがあり、それを目の当たりにする幸せをずっと感じてきた。今では、その当時の生徒たちと一緒に振り返ることのできる時間は、とても有意義である。

ブラックには負のイメージが多いが、決してそうではないと私は考える。ブラックホールは、全ての物質、光さえも吸収する。そもそも、ブラックとは、何をも跳ね返す（反射する）ことなく、全てのものを吸収できるというポジティブな色のことではないだろうか。

その二

私は徳之島の伊仙町に勤務している。伊仙町は私の十八年間育った郷土である。徳之島と聞

面縄中(大) 四 本 博 彦

いて、何をイメージするだろうか。ほとんどの人は「闘牛」をイメージできるのではないだろうか。そう、私の今の趣味は、闘牛観戦である。徳之島の子供たちは、幼少期から将来の夢は、「全島一」をもつことと作文に書くほどである。島一番の強い闘牛を育てることは、一家の、そして集落の名誉である。今でこそ、闘牛には様々な名前があるが、以前は持ち主の名前が闘牛の名前になることが主流であった。

主要な闘牛大会が開催される町営闘牛場が、校区内にある。本校の多くの生徒や保護者が、闘牛の育成に携わっている。闘牛の日々の世話を熱心に行っている生徒の姿を見に行くことも趣味の一つである。私も中学・高校と闘牛を育成した経験から、その大変さは十分理解している。それ以上に、どれほど多くの愛情をもって育てているか、その心の内

がよく分かる。

もちろん、世間では「教育上、課題があるという」負の側面が危惧されていることも理解している。だからこそ、生徒たちに自ら適切に判断し、行動できる力を身に付けさせていく必要がある。そのためには、指導者自身が背景を把握し、より深く理解することこそが、大前提である。

私は、これからも生徒や保護者が愛情深く育てている闘牛を全力で応援していきたい。徳之島の歴史や文化を紡いでいく若人たちを育成するために：。

郷土の紹介

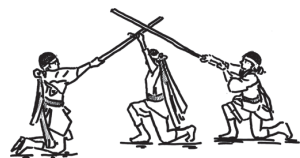
城址の学び舎

（後世に引き継ぎたい

教育活動）

川辺小（南）

谷 末 博 隆



一 はじめに

現在、全校児童四百四十四名、職員数三十四名の南九州市立川辺小学校は、元氣な歌声が響き、温かい眼差しの教師と熱心に勉学に励む子供が創立百五十一年目の歴史を刻む学び舎である。また、学校の建っている場所は、築城された年代は不明であるが、かつて平山城があった場所である。校庭は小高い山の平地にあり、城下町の風情と緑豊かな田園風景を一望でき、何か懐かしさを感じる。また、親子代々川辺小で学んだという家庭も多く、地域に愛される「心のふるさと」となっている学校である。

「みとめ合い・はげまし合い・たすけ合い」のそれぞれの頭文字をとった「みはたの心」をキャッチフレーズに掲げ、人権教育を基盤とし、教児共に、個性を認め、ほめ、励まし、互いに成長できる教育を推進している。また、校区には古くから伝わる文化や史跡が多い。恵まれた地域の教育的資源を活用した教育活動により、子供たちは、益々学校や地域に対

する愛着を深め、ふるさとを誇りに感じている。まさに後世に引き継ぎたい教育活動がここにある。

二 謎の川辺（平山）城

城跡に建つ学校自体が生きた教材となっている。本校の卒業生でもあり、県埋蔵文化センターに勤務されている先輩を講師に迎え、講師が作成した謎解きに取り組みながら、楽しく川辺城について学んでいる。川辺町郷土史によると、川邊氏が居城した後、島津氏も居城したとある。また、一四一七年、島津犬太郎が城主の時、隣接にあった松尾城城主と戦になったとある。

知らなかった史実や城の痕跡が今も残っていること、それらを普段見過ごしていたことに気付かされ、歴史学習の入口として興味・関心を高める学習となっている。

三 川辺祇園祭

学校の近くの商店街が歩行者天国となり、御所車や山車、神輿、踊り連が練り歩く、百年の歴史を誇る祭である。六年生の子供たちが御神輿の担ぎ手として参加している。事前学習では、市の学芸員に祭の由来等について学び、地域文化の理解や祭に込められた人々の願いを学ぶ機会となっている。

四 川辺仏壇

ご存知のとおり、川辺は全国屈指の仏壇の町である。本校では、四年生が総合的な学習の時間で、その伝統や職人の技術の高さ、町の誇るべき産業であること等を学んでいる。川辺で仏壇が作られたのは一一〇〇年頃で、仏壇を商品化した最初の人には池田某（一

八七六年）といわれている。その後だんだんと業者が増え、大正末期から昭和初期にかけて製造が本格化したようである。戦後、技術者が懸命に修行し、その高度な製造技術が国に認められ、伝統工芸としての地位を築いた。子供たちは、目玉の活動として、「世界に一つだけのお箸作り体験」を通じて、職人の方から金箔を貼る技術を学んでいる。

五 田んぼアート

川辺は古くから稲作が盛んな土地である。学校給食にも南九州市産の米が使用されることがあり、大変美味で子供たちにも好評である。



校区の田部田地区では、毎年、田んぼアートが披露され、全国から多くの観光客が訪れている。また、田植えと稲刈りには、五年生を中心に親子で参加し、貴重な体験学習の場となっている。



六 おわりに

本校ならではの学習や体験活動があること、これらがいかに教育的価値の高いものであるかを保護者や地域の方々に発信し、これらの学習活動が後世に受け継がれ、子供たちが未来を生き抜く力を身に付けていくことを願っている。

かえらぬ不幸を悔やむと 幸福が遠のく。

「たら」「れば」を捨て
早くスイッチを切り替え
新しいサクセスに向け
た思考に集中する。



天女ヶ倉 (写真提供：種子島観光協会)

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人 県校長会館だより

これまで、県校長会館主催で開催してきた教育講演会については、今年度から主催を日本教育会鹿児島支部とし、県校長会館の共催事業として実施します。

開催予定は、左記のとおりです。

○日時 令和七年十二月十四日(日) 十四時～

○会場 県医師会館大ホール四階

○講師 (選定中)

詳細につきましては、改めて御連絡いたしますが、先生方のたくさんのお来場をお待ちしております。

季節の言葉 「風薫る」

かきわける 白ののれんや 風薫る

風薫る 甘木市人 集ひ来て

正岡子規

高浜虚子

編集後記



プロ野球・読売ジャイアンツ終身名誉監督で、選手・監督として輝かしい成績を残し、「燃える男」「ミスター」の愛称で国民的人気を誇った長嶋茂雄さんが、六月に旅立たれました。長嶋さんが「私は、今日、引退いたしますが、我が巨人軍は永久に不滅です。」の言葉を残し、現役を引退されたのは、私が小学一年生の時でしたので、個人的には選手としてよりも、監督としての長嶋さんの印象が心に残っています。

勝ち試合を締めくくる継投を「勝利の方程式」として広めたのは長嶋監督とされています。「公式」もなければ、決まった「解」もない野球の魅力を発信し続けたのが長嶋監督でした。その「公式」や「セオリー」とは無縁と思われていた長嶋さんが口にする「勝利の方程式」だから面白いのですが、実際の采配は、セオリーを無視したものや、タブーと思われるものも多かったようです。

数年前、日本ハムの新庄剛志監督が、新入団選手に「一年間はコーチの言うことを聞かないで」と言ったのは、没個性の選手になってしまう前に、「自分の持ち味を伸ばしてほしい」というのが真意だったからでしょう。教育における「正解」を求めるのではなく、それぞれの児童生徒に合った教育方法を見つけて、個性を尊重し、主体的に学ぶ力を育むことが重要とされています。「正解は公式をたどって求めるのではなく、自分で作るものがあり、そこから個性も生まれる」と思わせるような両監督の言動と共通するものがあります。

最後になりましたが、御多用な折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に感謝し、厚くお礼申し上げます。

兒玉 秀郷 (明校館高校)